

『紅樓夢』 白海棠考

——明清の詩詞における白海棠の描写から——

渋井君也

はじめに

花の描写は、『紅樓夢』の重要な特徴である。合山究は「花は『紅樓夢』において、作中の美女たちと分かちがたく結びつき、作品の構成や人物の造型にまで深いかかわりを持っているようである。そのようなわけで、花は美人とともに、『紅樓夢』世界を成立させる二大要素をなしているといつてよい」と指摘し、『紅樓夢』における花の描写の重要性について論じている。

『紅樓夢』に登場する花の中に、「白海棠」という花がある。『紅樓夢』第三十七回において、海棠詩社が作られ、詩社の活動として「白海棠を詠ず」六首が作られている。先行研究では、「白海棠を詠ず」六首の内容・表現とともに、作者がそれらの詩作を通して登場人物の個性や運命をいかに表現しているかなどについて、清代からさまざまな批評や議論がなされている。『紅樓夢』における白海

棠を考察する際、実際に植物としての白海棠がどのように社会で受容され、鑑賞されてきたかを検討する必要があると同時に、『紅樓夢』に先行する文学が形成してきた白海棠に対する描写やイメージを検討する必要がある。しかし、筆者の管見によれば、『紅樓夢』に先行する白海棠を詠ずる文学と、『紅樓夢』における白海棠の描写を比較する研究はなされていない。

「海棠」は古代から文人に注目され、それに関する研究はしばしば見られるが、「白海棠」に関しては、『紅樓夢』における白海棠の研究以外、ほとんど研究されず、特に、中国において「白海棠」は文学作品においてどのように描写されてきたのか、また「白海棠」の文学的イメージは、唐代から読みつがれてきた「海棠」のそれに対してどのように位置づけられるのか、ということについて論及したものはない。本稿では、まず『紅樓夢』中の白海棠の描写について整理する。次に、『紅樓夢』に先行する「白海棠」を詠じた作品の概況や、それらの作品がどのような文学的イメージを形成してい

たかについてまとめる。最後、両者を比較し、『紅樓夢』における白海棠の描写について検討していく。

一 「白海棠」はどのような花なのか

本論に入る前に、まず実際の植物として「白海棠」という花がどのような花なのかについてまとめておく。「海棠」と呼ばれる花は、一般的に春に咲くバラ科の樹木の花海棠を指すもので、これにはさらに西府海棠や垂糸海棠などを含む。一方、花海棠とは全く別の品種であるが、花の形が似ているので「秋海棠」と称されるものがあり、それは秋に咲くペゴニア科の多年草である。また、バラ科の花海棠もペゴニアの秋海棠も、紅い花と白い花のどちらも咲くが、紅色の花が咲くのが普通である。

『紅樓夢』における白海棠を考察する際、まずそれと「秋海棠」との関係に注目すべきである。『紅樓夢』において、海棠詩社は旧暦八月の秋に結社されるが、姜楠南・湯庚国・沈元宝は、花海棠で秋に白い花を咲かせる種類はないので、海棠詩社設立の際に届けられた白海棠二鉢は「秋海棠」だと結論づけている^②。また、元代の伊世珍輯とされる『瑯嬛記』に引く『採蘭雜志』に「秋開。名曰斷腸草、又名八月春。即今秋海棠也」とある^③。秋海棠が別名「八月春」ともいうから、森中美樹は白海棠が秋海棠であることがわかると指摘している^④。森中美樹は、また秋海棠と涙と美人との密接な関係か

ら、林黛玉の「還淚因緣譚」に結び付けて論述している。

「白海棠を詠ず」六首のうち、直接的もしくは間接的に「秋」と関連する言葉は「秋階」「白帝」「秋容」「秋閨」「秋蔭」「悲秋」などが挙げられている。このことから、作者が意識的に白海棠を「秋」に結びつけていることが推察できる。しかし、『紅樓夢』において当該の花は「白海棠」と称されるばかりで、一度も「秋海棠」の名前は出されていない。それはなぜだろうか。

例えば、秋海棠に関しては『広群芳譜』卷三十六に「一名八月春草本、花色粉紅、甚嬌艷」とある^⑤。「粉紅」「嬌艷」で示されるように、淡紅色で艶かしいさまは秋海棠の特徴であることがわかる。もちろん、秋海棠の中にも白色のものがあり、例えば、曹雪芹の祖父曹寅には「夢中詠白秋海棠、醒足成之」という七言絶句がある^⑥。しかし、秋海棠と白海棠との最も重要な違いは、秋海棠は海棠の品種によって区別されたものであるが、白海棠とはあくまで花の色の特徴によって紅い海棠と区別された呼称である。海棠には「白海棠」という品種は存在しない。例えば、明末の郭之奇（崇禎十年進士）には「憶王孫・白海棠」詞がある。

一枝横瘦未勝春，淡洗鉛華出素新，曉怯東風落絳唇，似羞人，
紅紫紛紛莫漫嗔。^⑦（傍線は筆者より、以下は同じ）

郭之奇の詞における「未勝春」「東風」や「淡洗鉛華出素新」から、この詞中の白海棠は春に咲く花海棠の白い花であることがわかる。このように、文人の意識において、花海棠か秋海棠か、春か秋

か問わず、白い花が咲く海棠は「白海棠」と称していたらしいことが伺える。それによって、『紅樓夢』において秋海棠の名前が出されず、白海棠と称されるばかりというのは、海棠の植物分類学の立場からだけでなく、白い花が咲く海棠という花の色彩の面からも考察すべきではないかと考えられる。では、まず『紅樓夢』において白海棠はどのように描かれることから検討していく。

二 白海棠と海棠詩社

『紅樓夢』第三十七回において、賈宝玉の妹である賈探春は詩社を起こすことを提案した際、おりから、賈家の召使いである賈芸が賈宝玉に白海棠を二鉢送ってくる。賈宝玉の兄嫁である李纨が、白海棠を詠ずるように提案し、賈探春は海棠の詩をきっかけに、海棠から名を取って詩社の名とした。第一回目の詩社の活動として、「白海棠を詠ず」六首が作られた。では、海棠詩社や白海棠詩をめぐる「白海棠」は作中でどのような意義をもつのだろうか。それについては、まず先行研究から検討していく。

寶玉喜道……你們就如秋天芸兒進我的那纔開的白海棠。」⁸⁾
(第五十一回)

賈宝玉は侍女たちに「お前たちはこの秋に賈芸がほくに持ってきてくれた、あの咲いたばかりの白海棠みたいなものだ」と述べる。陶先准・陶劍は、それが賈宝玉の口を借りて大観園の女性たちを海

棠に喩えていると指摘している。⁹⁾

第一回目の詩社の活動で白海棠の詩を作ったのは、賈探春・薛宝釵・賈宝玉・林黛玉と史湘雲の五人である。そのうち、史湘雲は一人で二首を作っている。

賈探春 玉是精神難比潔，雪為肌骨易銷魂。

薛寶釵 胭脂洗出秋階影，冰雪招來露砌魂。

賈寶玉 出浴太真冰作影，捧心西子玉為魂。

林黛玉 半卷湘簾半掩門，碾冰為土玉為盆。

史湘雲 其一 秋陰捧出何方雪，雨漬添來隔宿痕。

其二 玉燭滴乾風裏淚，晶簾隔破月中痕。

上掲の白海棠詩から、「氷」「雪」「玉」などを用いて白海棠のけがれない姿を描いている点が共通していることがわかる。

(衆人) 都説……這個不枉做了海棠詩！真該要起海棠社了！」
(第三十七回)

史湘雲は一人で二首を作り、みんなは彼女の詩こそ「海棠の詩を作ったと誇れるもの、ほんとうに海棠社を起こすべきだ」と言っている。脂硯齋も史湘雲の詩句「秋蔭捧出何方雪」は「壓倒群芳、在此一句／みんなの作を圧倒するのは、この一句のためだ(己卯本第三十七回挾批)¹⁰⁾」「二首真可壓卷／二首はまさに圧巻の作だ(同前)」と評している。そのことから、作者も脂硯齋も史湘雲の詩を推挙していることがわかる。「何方雪」を用いて白海棠を形容していたからこそ評価を得たものであろう。では、なぜ「雪」を用いて

白海棠を描くことが評価されるだろうか。そこから何が見て取れるだろうか。まず、『紅樓夢』に先行する「海棠」詩と比較していく。

海棠の由来について、宋・沈思「海棠譜」に引く『花木記』には、「凡そ花木の名に海の字をつけて呼ぶものはみな海外から来たもので、海棠の類の如きがそれである」とある。¹¹ また明・李時珍「本草綱目」卷三十にも同じく上掲『花木記』の一句が引かれ、海棠が海外から伝来してきたものの根拠とされている。¹² このことから、古来海棠は中国の本土ではなく、外国から伝来してきたものと考えられていたと見てよいだろう。

海棠が詩に登場するのは中唐以降であるが、宋代に入ると一躍人氣の花になった。¹³ 以下では、唐代から明代にかけての「海棠」の姿を詠ずる詩句の一部を集めた。

濃麗最宜新着雨，嬌嬌全在欲開時。 唐・鄭谷「海棠」

幽態竟誰賞，歲華空與期。川回香盡處，泉照艷濃時。

唐・温庭筠「題磁嶺海棠」

香靄何驚目，鮮妍欲蕩魂。向人無限思，當畫不勝繁。

宋・晏殊「海棠」

芳菲占得歌臺地，妖艷誰憐向日臨。

宋・宋太宗「海棠」

嬌嬌不減舊時態，誰與丹青為發揚。

宋・宋光宗「會僚屬賞海棠偶有題詠」

綠嬌隱約眉輕掃，紅嫩妖嬌臉薄粧。

宋・王安石「海棠」

海棠已試十分粧，細看妖嬌更異常。 宋・趙次公「寄朝宗」

丹葩翠葉競妖濃，蜂蝶翻翻弄暖風。 宋・范純仁「西園海棠」

誰道名花獨故宮，東城盛麗足爭雄。 宋・陸游「海棠」

競艷嬌紅最是他，教人嫌少不嫌多。 宋・楊萬里「海棠二首」

其二

翠葉輕籠豆顆勻，胭脂濃抹蠟痕新。 金・元好問「同兒輩賦未

開海棠二首」其一

江花低扶座，窈窕雨中枝。濕翠濃芳樹，嬌紅裊碧絲。

明・王叔承「兩中看垂絲海棠」

上掲詩作において、海棠の姿を表す際、「嬌嬌」「妖嬌」「艷濃」「胭脂濃抹」などの言葉が圧倒的に多く使われている。

一方、注目の高い紅色の花が咲く海棠に比べて、白海棠という言葉は多少文献に見られるが、管見の限り、明末まで「白海棠」と題する詩作は見当たらない。¹⁴ ただし、白い花が咲く海棠を描くものもある。例えば、元代の呉景奎（一二九二—一三三五）は「故園多海棠，其一樹大數十圍，樹頂一枝如雪白，因賦」があり、「雪魄幻作花中仙」「澹妝獨立東風裏，冷笑漫山舊桃李」「得如梨雪聊相温」「翠袖冰姿生媚態」のように白い花が咲く海棠の姿を描く詩句が挙げられる。¹⁵ このように、遅くとも元代には白い海棠を詠ずるものが見られる。しかし、海棠と言えば、やはり紅い花が咲くというのが通念であり、白海棠は、あまり文学的イメージ形成の対象になら

なかった。明末清初になってようやく明確に「白海棠」と題する詩詞が現れるようになった。以下では、明末清初から乾隆年間までの「白海棠」を詠する詩作の一部を集めた。

枝間開不久，却與膽瓶宜。豈有海棠好，而兼白雪姿。清・屈大均（一六三〇—一六九六）「瓶中白海棠」¹⁶

盈盈澹澹内家妝，睡足雕闌上月光。笑著霓裳頻自舞，風來疑送一庭香。清・李麟（一六三四—一七一〇）「咏白海棠」¹⁷

芳心脉脉怨天涯，玉砌清香透碧紗。定是淚珠和粉落，西風吹作斷腸花。清・汪文柏（二六六二—一七二二）「白海棠二首」その一¹⁸

紅濕千株簇錦官，洗粧春睡淡生寒。詩人不是西川客，只作梨花月底看。清・汪由敦（二六九二—一七五八）「題惲南田畫冊六首」の「白海棠」¹⁹

嫣紅尚愁人，何堪更縞素。日暮嘿垂頭，貞心畏行露。清・全祖望（一七〇五—一七五五）「白海棠」²⁰

上掲の詩作から、いくつかの特徴が見られる。まず、「白雪姿」「盈盈澹澹」「玉砌」「洗粧」「縞素」など白海棠の姿を描く表現が見られる。

次に、例えば、汪文柏詩には「西風吹作斷腸花」とあり、「西風」には秋風の意味があり、「斷腸花」は秋海棠の別名で、そこから汪文柏詩における白海棠は秋海棠であることがわかる。一方、汪由敦詩には「洗粧春睡淡生寒」とあり、「洗粧春睡」から作者が春

に咲く海棠を意識しながら作詩したことがわかる。前掲した吳景奎の詩の題目に「其一樹大數十圍、樹頂一枝如雪白」とあり、それに詩中の「冷笑漫山舊桃李」などから、該詩は春に咲く花海棠であることがわかる。このように、「白海棠」という文学言語においては、「海棠」という名称の下に品種は混在し、その品種に関わらず、「白」という色彩の特徴によって、一つの文学イメージを形成しているようである。

さらに、全祖望詩における「嫣紅尚愁人、何堪更縞素」のように、白海棠の「白」と海棠の「紅」とを対照的に描くことも白海棠を詠する詩詞に見られる重要な特徴である。例えば、清代の羅天尺（乾隆元年舉人）「集家鄰栽嘉樹軒咏紅白海棠各一首」²¹においては、紅い海棠と白い海棠をそれぞれ一首ずつ作ったものである。『海棠譜』に引く『長樂志』には、「海棠は色が紅い。木瓜を以て接げば、色が白くなる」とある。²²黄崇浩はそれによって、白海棠がつきざされた変種のものであると考え、特に薛宝釵の「白海棠」詩中の「胭脂洗出秋階影」の一句がその影響を受けたと指摘している。²³薛宝釵の「胭脂洗出秋階影」から、確かに作者が意識的に白海棠の「白」と海棠の「紅」との関係を描いたことが見て取れる。白海棠の「白」は胭脂のような紅い色が洗われて白くなったのだという表現は『紅樓夢』より早く清代の方中徳「和韓聖秋白海棠詩」にすでに見られる。

雨洗風吹色不同，胭脂并在淡烟中。等閒免得牛羊踐，誰信當年

『面發紅』清・方中徳「和韓聖秋白海棠詩」（清・王士禎『感舊集』巻八に見える）

方中徳は、字は位伯、江南桐城の人、父は方以智（一六一一—一六七一）である。この詩には「胭脂井」の典故が用いられ、また「雨洗風吹色不同」「誰信當年面發紅」から、雨に洗われて風に吹かれるため、胭脂のような紅い色が落ちて白く変わったことが表されている。「和韓聖秋白海棠詩」における韓聖秋は即ち韓詩（？—

一六六二）、字は聖秋、号は固庵、陝西三原の人である。『感舊集』巻五にも、韓聖秋の詩が十首収められている。『感舊集』は王士禎（一六三四—一七二二）によって編まれた清初の詩の総集である。

王士禎は清初の詩壇のリーダーであり、交遊が非常に広く、晩年生涯の故人・友人の詩作を編集して『感舊集』と名付けた。⁽²⁴⁾『感舊

集』に方中徳や韓聖秋の詩が収められることから、方・韓二人ともに王士禎と交遊があることがわかる。方中徳の「和韓聖秋白海棠詩」は韓聖秋に応えて作った「和詩」である以上、韓聖秋も「白海棠」に関する詩作はあるはずだと考えられるが、筆者の管見の範囲では、それは残されていないようである。また、王士禎自身は白海棠の詩作を残していないが、彼の『池北偶談』には次の興味深い記載が見られる。

「白海棠」

范烈女者、易州范良鼎女、許字田、未婚而夫死。烈女聞之、即自縊。庭前有海棠一株、方花時、甚穠艷、女死、花忽變白。一

時文人奇之、多爲賦詠云。（『池北偶談』巻二十四「談異五」）⁽²⁵⁾

『池北偶談』に見える「白海棠」には、夫の死を聞いた烈女が首をつつて自殺し、庭の前にある海棠の花が「穠艷」から突然「白」になることが描かれている。また清代の王応奎（一六八三—一七五九）の『柳南統筆』にも類似の記載が見られる。

「海棠白花」

靜海勵文恭公、家居時手植西府海棠二株於庭。垂二十年。公歴官至尚書、卒於位。靈樞歸里時當秋日、而海棠忽開白花滿枝、鄒元褒大史為繪白海棠圖、諸詞人各系以詩次山侍御為余述之如此。（『柳南統筆』巻三）⁽²⁶⁾

『柳南統筆』の「勵文恭公」こと勵杜訥（一六二八—一七〇三）は康熙朝の名士で、刑部尚書として公明正大の誉れ高かった「清官」である。「白」は「服喪」の色であり、海棠が彼らの死を哀悼したということである。これらの記事では、「白」は「貞節」「清官」という人格表現にも結びついていると思われる。

以上海棠が唐代の詩に登場して以降、主に「紅い色」の持つ「妖艶さ」に文学的イメージが集中していた。一方、白い海棠は古くからも存在したが、主流であった紅い海棠の下で、あまり注意されなかった。明末清初に至って、白海棠はようやく文人たちに注目され、交遊や唱和の際に詠じられる対象となった。更に海棠の花は「穠艷」から白くなることで、「烈女の死」や「名士の死」に際して生

じた不思議、という伝説に結びつく話まで発展していた。

三 彭孫貽（一六一五—一六七三）の「詠白海棠」詩

明末清初から現われている「白海棠」詩の中に、彭孫貽の『茗齋集』⁽²⁷⁾に彭孫貽と弟の彭孫適などと作った「詠白海棠——同子服・駿孫両弟作」「再詠白海棠」⁽²⁸⁾がある。

春日偶得白海棠一枝、同兩弟古賦詩賞之。（『茗齋集』卷五）

因忽見有白海棠一種、不可多得、故變盡方法、只弄得兩盆。

（第三十七回）

彭孫貽が白海棠を詠じたきっかけは、「たまたま白海棠一株を得る」ことである。「春日」から、詩中の「白海棠」が秋海棠ではないことがわかる。『紅樓夢』においては、召使いの賈芸が偶然に白海棠を見て、めったなことでは手に入らないものだから、手を尽くして二鉢を手に入れて賈宝玉に送ることは、後に皆が白海棠を詠ずるきっかけとなった。彭孫貽らの詩において、「白幽」「雪」「白衣」「淡冶」「淡容」「残雪」などを用いて白海棠の清らかな「姿」を描いている。

無色無香致白幽（孫適詩） 蕭疎遠映遙疑雪（胤仙詩）

白衣應是山人伴（胤仙詩）

——「詠白海棠——同子服・駿孫両弟作」

一枝淡冶送輕寒（孫貽詩） 浣花深院雪偏殘（孫貽詩）

淡容掩映弄春華（胤仙詩） 柔絲裊裊疑殘雪（胤仙詩）

——「再詠白海棠」

『紅樓夢』においては氷雪などを用いて白海棠の姿を表し、『茗齋集』における白海棠の詩と表現上では類似性が見られる。

彭孫貽は明末清初の文人、『清史列伝』卷七十には「彭孫貽、字は仲謀、浙江海鹽の人である。……詩に長じて、七言律詩は放翁に倣い、王士禎に称賛される」とある。上掲の「詠白海棠——同子服・駿孫両弟作」及び「再詠白海棠」は『茗齋集』卷五、彭孫貽の手稿本に見える。また刊行本の『百花詩』⁽²⁹⁾においても、彭孫貽の二首の白海棠詩が収められ、「白海棠二首」に作られるが、彭孫適や彭孫纘や胤仙の詩作は『百花詩』に収められていない。

王士禎の「彭孫貽伝」には、「陳公子龍は彭孫貽の巻を得、その才に驚き、……彭孫貽は陳の知己の恩に感謝し、遂に陳の門後と称した」とある。⁽³⁰⁾このことから、彭孫貽は王士禎や陳子龍と交遊があることが分かる。また彭孫貽の弟である彭孫適（一六三一—一七〇〇）も康熙年間の博学鴻詞科に一等一名で合格し（『清史稿』卷四百八十四）、清初の有名な文人士者である。

薛宝釵の「胭脂洗出秋階影」と方中徳の「和韓聖秋白海棠詩」において、白海棠の「白」は胭脂が洗い落とされて白くなったのだという点における共通性が見える。『紅樓夢』における白海棠は召使いの賈芸が主人の賈宝玉に献上したものであるが、李紈に見られそこで李紈は衆人に白海棠を詠ずるように提案した。しかも、作詩

の後、皆は作られた詩に対して批評もし、参加者はすべて買家の人やその親戚である。それが『茗齋集』における「春日偶得白海棠一枝、同兩弟古賦詩賞之」という彭孫貽や弟たちの白海棠を詠する縁起や、作詩の後卮仙が皆の詩に対して評するという描写とが似ている箇所である。

周知のように、王士禎は清初の文壇に大きな影響を与えた代表的な文人である。彭孫貽もその才能が陳子龍や王士禎に認められ、彼らと交遊もある。また彭孫貽の弟である彭孫適は王士禎と交遊があり、当時「王士禎と同様に有名で、「彭王」と呼ばれる（『清史稿』卷四百八十四）」のである。さらに何よりも、以上の考察を通して、『紅樓夢』における「白海棠」詩と方中徳や彭孫貽の「白海棠」詩とは、詠じられた対象が同じだけでなく、描写においても相当な類似性が見られる。こうした例から見ると、白海棠は当時の文人に珍重されるようになり、それを詩題にし、詩会を開いたり唱和詩をしたりするということが行われていたのであろう。

終わりに

以上、明清の「白海棠」を描いた詩詞や雑記から、『紅樓夢』における白海棠の描写について考察を加えた。唐宋時代にすでに注目された紅い花が咲く「海棠」に比べて、「白海棠」は明末清初によくやく注目された。前述したように、「白海棠」という文学上の称

呼は、植物学的な分類とは別に、海棠の花の色彩に注目してイメージを作ってきたものといえる。つまり、海棠だろうか秋海棠だろうか、文人たちが「白海棠」という詩語を「海棠の白い花」と捉え、「白」にイメージをふくらませていた。

また、白海棠の文学的イメージが形成されていく過程では、紅い花が咲く海棠の役割も看過できない。例えば、前掲の郭之奇の「白海棠」詞中の「曉怯東風落絳唇」や全祖望の「白海棠」詩中の「嫣紅尚愁人、何堪更縞素」において、詩の作者は白海棠を描くときに、紅い花の海棠も詠じ忘れていない。そこから、紅い花とその色の醸し出す連想が、文人たちの「海棠」という詩語に対する中心的イメージを形成していることが伺え、同時に主流を成した紅い花の海棠とは鮮明に異なる「白色」を持つからこそ、白海棠は注目される原因といえよう。実際に『紅樓夢』においても海棠の花の「紅」と「白」の問題が存在されている。例えば、賈宝玉の住む怡紅院には紅い花の咲く西府海棠がある。

賈政與衆人進去，一入門，兩邊都是遊廊相接，院中點綴幾塊山石，一邊種着幾本芭蕉；那一邊乃是一棵西府海棠，其勢若傘，

絲垂翠縷，葩吐丹砂。……寶王道：「大約騷人詠士，以此花之色紅暈若施脂，輕若似扶病，大近乎閨閣風度，所以以女兒命名。……。」（第十七至十八回）

「葩吐丹砂」の描写から、西府海棠が典型的な紅い花が咲く海棠であることがわかる。「紅暈若施脂」は西府海棠の花の色が紅くて

ほんのりと「胭脂」をさしたようであることを描いている。それに
対して、薛宝釵の「白海棠」詩中の「胭脂洗出秋階影」において、
白海棠の「白色」は紅い「胭脂」が洗われて白くなることが描かれ
ている。そこから、海棠の「紅」と「白」をめぐる作者の創作上の
工夫が伺えるだろう。また、賈宝玉の「怡紅快綠」詩において西府
海棠を描く詩句「紅妝夜未眠」が挙げられ、それは蘇軾の「海棠」
詩の「只恐夜深花睡去、故燒高燭照紅妝」を踏まえたものである。

以上『紅樓夢』の作者は、白海棠や紅花の海棠に形成された
「白」と「紅」という文学的イメージの区別について、はっきりと
認識していることがわかる。しかも、主流的で伝統的な紅花の海棠
についても、歴史がなお浅い白海棠についても、作者はそれまで創
作された文学作品が積み重ねたイメージを巧みに踏まえていること
が見て取れる。

最後に指摘したいのは、白海棠は詩詞や筆記小説などに見られる
が、長編章回体小説において、白海棠に着眼にして作中につきかり
した意義をもたせた作品は、『紅樓夢』以前には存在しない。『紅樓
夢』において、作者は白海棠を借りて女性たちの純潔さを表しただ
けではない。それまで主流であった、「艶やか」「濃艶」を表す海棠
の詩ではなく、明末清初からようやく見られるようになった白海棠
を詠ずる文学を、いかに通俗小説にも取り込ませ、「氷雪」「純潔」
という海棠の表現世界を開拓するかという点も作者の創作の狙いで
はないかと考えられる。

注

- (1) 合山究：『紅樓夢と花』、『未名』第二号、中文研究会、一九八二年九月。
なおこの論文に加筆したものが、合山究（著）『紅樓夢新論』（汲古書院、
一九九七年）第一章（三・五二頁）に収録される。
- (2) 姜楠南・湯庚国・沈永宝：『紅樓夢』海棠花文化考、『南京林業大学学
報（人文社会科学版）』、第八卷第一期、二〇〇八年三月。
- (3) 引用は清代の張海鵬（輯）『學津討原』（『百部叢書集成』、藝文印書館、
一九六五年）所収のものに拠った。
- (4) 森中美樹：『紅樓夢』中の花の役割——第三十七回の「海棠詩社」にお
ける「白海棠」——、『中国学研究論集』創刊号、広島中国学会、一九
九八年。
- (5) 〔清〕汪灝等：『廣群芳譜』、新文豊出版公司、一九八〇年。
- (6) 〔清〕曹寅：『棟亭詩鈔』卷五（『棟亭集』）、上海古籍出版社、一九七八
年。原詩：「拱生舊說雲臺觀、大葉曾推祗樹林。無夢誰憑花作想、有情空
訝粉沾襟。一叢冷艷披黃子、幾點秋蘭慳素心。試問明珠綠底淚、斷垣荒砌
不堪尋。」
- (7) 〔明〕郭之奇：『宛在堂文集』卷二十（『扼中国科学院図書館所蔵明崇禎刻
本影印』）。
- (8) 本稿で引用した『紅樓夢』の原文は、主に庚辰本を底本とし、適宜以下
の排印版のテキストを参照した。〔清〕曹雪芹（著）、馮其庸（重校評批）：
『瓜飯樓重校評批紅樓夢』、遼寧人民出版社、二〇〇五年。
- (9) 陶先進・陶劍：『臨歧幾點相思淚 滴向階前發海棠——試論『紅樓夢』
的眼目和白海棠詩——』、『中国文學研究』、一九九五年第二期。
- (10) 脂硯齋の批評について、各版本を照らし合わせるほかに、文字の校訂と
句読点などは、陳浩慶（編著）『新編石頭記脂硯齋評語輯校（増訂本）』
（中国友誼出版公司、一九八七年）を参照した。
- (11) 〔宋〕陳思：『海棠譜』、『叢書集成初編』、商務印書館、一九三九年。
- (12) 〔明〕李時珍：『本草綱目』（第三冊）、一七六七頁、人民衛生出版社、一

九七八年。

- (13) 岩城秀夫・「杜甫に海棠の詩のないのは何故か——唐宋間における美意識の変遷——」、《中国詩人論 岡村繁教授退官記念論集》、三九九・四二一頁、汲古書院、一九八六年。
- (14) 明代まで「白海棠」に関する作品には、『白海棠記』は見られるが、原作は伝わっていない。『群書類選』には「郊外邂逅」、「月露音」には「邂逅」が引かれるが、実際に同じく一折である。
- (15) 元代の呉景奎の『葉房樵唱』(『元詩選』二集所収、中華書局、一九八七年)に見える。原詩・「太真酒酣睡未足。深宮已縱銜花鹿。翠華一夜拂峨眉。風塵瀕洞黃金屋。馬嵬香土埋嫺娟。冶容悔與春爭妍。似聞天王狩太白。雪魄幻作花中仙。澹妝獨立東風裏。冷笑漫山舊桃李。芳心恨不聘梅花。雨中有淚如鉛水。蜀山紫棉同本根。得如梨雪聊相溫。凝脂醞藉初出浴。玉臆波暖春粼粼。瑤臺月下相逢處。翠袖冰姿生媚嫵。更燒銀燭醉中看。髣髴霓裳羽衣舞。」
- (16) 〔清〕屈大均・『屈翁山詩集』卷三(挾早稻田大学図書館所蔵清刻本)。原詩・「枝間開不久。却與膽瓶宜。豈有海棠好。而兼白雪姿。艷含膏露薄。香出粉光遲。異種非西蜀。花翁定未知。」
- (17) 〔清〕李麟・『虬峰文集』卷十三(挾北京図書館所蔵清康熙刻本影印)。
- (18) 〔清〕汪文柏・『柯庭餘習』卷十一(挾上海図書館所蔵清康熙刻本影印)。
- (19) 〔清〕汪由敦・『松泉集』卷三(『文淵閣四庫全書』所収)。
- (20) 〔清〕全祖望・『鮚埼亭詩集』卷六(『四部叢刊』所収)。
- (21) 〔清〕羅天尺・『瘦暈山房詩刪』卷十三(挾中山図書館所蔵清乾隆刻本影印)。原詩・「西行莫認杜鵑枝。袖卷紅紗映雪姿。乞得桃花箋子好。寫他沉醉未醒時。」無香誰信兼無色。明月微茫上翠細。似抱幽人無限恨。詩家空有四娘篇。」
- (22) 前掲〔宋〕陳思の『海棠譜』参照。
- (23) 黄崇浩・「海棠魂夢繞紅樓——對『石頭記』中海棠象徴系統的考察——」、『黃岡師範學院學報』、二〇〇一年二月。
- (24) 『感舊集』にはすべて三百三十三人の詩が二千五百七十二首収められるが、王士禎の生前には出版されなかった。王士禎の死去した後、同郷の後進である盧見曾(一六九〇・一七六八)がそれを整理し出版し、後世に伝えたのが乾隆壬申(一七五二年)刊本である。
- (25) 〔清〕王士禎(撰)・『池北偶談』、五七一・七二頁、『清代史料筆記叢刊』、中華書局、一九九七年。
- (26) 〔清〕王昶奎・『柳南隨筆・統筆』、一八八頁、『清代史料筆記叢刊』、中華書局、一九九七年。
- (27) 『茗齋集』は二十三巻の詩文別集である。二十三巻のうち、第一巻『茗齋集』と第十九巻『百花詩』は刊行されたが、そのほかは手稿本や抄本で流布されている。第十九巻『百花詩』の前に彭孫貽の自序が見えるが、恐らく彭孫貽の生前にすでに刊行されたものと考えられる。第一巻『茗齋集』は同じ郷里の張伯魁より嘉慶十四年(一八〇九年)に刊行されたのである。民国初年、出版家の張元済は、彭孫貽の手稿本や数種の抄本を発見収集した。創作の年月順で排列し(『百花詩』除外)、王士禎の「彭孫貽伝」や徐盛全の「孝介先生伝」を付け加え、『四部叢刊統編』(商務印書館、一九三四年)に収め、民国年間で影印し出版したのである。
- (28) 原詩の全文は次のとおりであるが、句読点や段落は筆者による。
- 『詠白海棠——同子服・駿孫兩弟作』
- 東風裊裊弄柔姿，幽艷輕盈點雪墀。柳絮簾垂春思冷，畫樓人睡月明遲。飛來玉燕枝微動，夢入梨花蝶未知。莫更催詩照銀燭，少陵野老鬢如絲。
- 春日偶得白海棠一枝，同兩弟古賦詩賞之。
- 孫纘・弱態絲絲對短廊，一枝幽雅伴羣芳。映來月下偏宜素，恨在風前未有香。遙倚梨花春黯淡，靜看銀燭夜昏黃。浣花溪上人知否，獨少新詩寄草堂。
- 孫適・亭亭孤韻足風流，無色無香致白幽。霧縠欲仙長掩袖，玉壺有淚只低頭。疎簾半織春前雨，子夜偏宜月下遊。院落誰人惜狼籍，六朝

宮粉暗成愁。

詩罷，諸弟戲懸崑降仙，已而崑動，呂僊降評三詩曰：貽詩清新秀雅，然聲調非大曆以前作，置之宋人中，可稱絕唱。續詩溫雅有節絕，似鍾譚手筆。然亦非初唐格調。適詩好為麗句，詞家所卑，然詠物難上，亦時流所難得者。花神有靈，當信予言之不誣也。貽等因請崑仙亦占此一律。

崑詩：久向花間勝遊，淡粧微韻足風流，蕭疎遠映遙疑雪，旖旎初開倦倚樓。睡去欲燒銀鳳燭，摘來應帶玉搔頭。白衣應是山人伴，何事新詩獨未酬。

崑仙自評：此詩偶作詠物，原非大家所長，終流于纖麗，可方義山飛卿集中作，不敢望開元諸子。

——「再詠白海棠」

一枝淡冶送輕寒，寒食芳郊雨後看。遲日游絲春更靜，浣花深院雪偏殘。神仙縹緲飛瓊下，才子風流傳粉難。從此韶光妬顏色，無人重倚玉闌干。

孫續詩：柔枝着雨帶新煙，白燕雙棲小樹邊，閉院雪殘寒食後，題詩人老杜陵前。睡餘蝶粉花間夢，舞罷霓裳月下仙。占盡流光迴素影，紛紛紅紫自爭妍。

孫適詩：柔情艷冶暗相親，擅絕姿容照落茵，雨後倚闌全欲睡，風前撲絮不勝春。坐深蝶粉疑無影，妬學蛾眉恰有人。夢到玉樓還縹緲，空庭月色已如銀。

崑又評：貽詩名家妙手，曾負時望，遠近所賞，此作新麗，全得其神，洵稱作乎。續詩結想命詞綺語中亦有驚人語，獨步騷壇，羣英所悅首看。適詩少年大雅，美秀新裁，令人飄飄欲仙，子之謂也。後將望子追駕唐賢花萼新篇，在卿家三子矣。貽按，前評尚多抑揚，此評惟有溢美，乃知天上神仙亦效人間世法耶。又崑稱坡仙降，亦賦此題一首。

雨過中庭尚有花，淡容掩映弄春華。柔絲裊裊疑殘雪，舞蝶飛飛夢幾家，素影不堪紅燭照，芳魂常許玉闌遮，舊題前輩還相憶，老眼狂歌月

未斜。

時弟輩有誦坡公夜深花睡句者，故崑筆及之。

(29) 刊行本『百花詩』について前掲『茗齋集』の注参照。

(30) 原文：「陳公子龍得公卷，奇其才、……公感陳知己、遂稱及門後。」王士禎の「彭孫貽伝」について前掲『茗齋集』の注参照。

